

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

発行：2001.9.21

特定非営利活動法人森林再生支援センター 理事長 村田 源
〒603-8145京都市北区小山堀池町28-5 TEL/FAX 075-211-4145
ホームページ <http://www.crrn.net> E-mail : info@crrn.net

市民にとっての「里山」のために

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 専門委員 - 監事
下村 泰史

ここ数年で、里山という言葉は随分ポピュラーになりました。テレビや新聞でその言葉を聞かない日はない、という少々大袈裟ですが、マスコミにも随分高い頻度で取り上げられるようになってきているように思います。

人が関わり、手を入れていなくては里山は荒れていってしまう。何らかの管理が必要である、というのは、里山の保全に関わっている人々の共通認識です。かつて農村共同体でなされていたような利用・管理がなされなくなってしまったことを踏まえて、今日的な方法で里山を生かすことが模索されるようになりました。

例えばレクリエーションを兼ねたような体験型・市民参加型のプログラムが脚光を浴びたりしています。実際に一般市民（多くの場合都市住民）がボランティアとして山に入っていく、というタイプの活動事例は数多く報告されるようになってきました。いろいろな団体があって、野遊びに近いものから学究的なものまで、さまざまな地域で活発な活動が行われています。そうした行動的な市民が日本にもちゃんと存在するということには、とても勇気づけられるものがあります。

そうした報告だけみていると、ボランティアだけで日本の里山の未来は万々歳のように思われてくるのですが、実際には「こうした市民参加の対象となる里山はごく一握りにすぎないことも事実であり、大部分は放置されていることを忘れてはならない」()のです。

里山の経済的価値の喪失は最大の問題点かもしれませんが、それに加えて土地所有の問題や、入会地の共同利用秩序の崩壊などの問題があって、外部のものがなかなか手をつけにく

い現状があります。民間の所有者によって放置されたままになっている里山については、そこに「市民」と称する人々が他所からやってきて木をいじるだけでは全く解決しない、地域的社会的問題が横たわっているのです。

今、里山は分裂した状況にあると思います。

第一の分裂は、すでに挙げた環境保全に関わる主体の分裂です。「行政」「住民」の対立はこれまで環境保全運動においてつねに見られたものですが、これは近年の住民参加の潮流のなかで調停されつつあるように見えます。一方で森林環境の参加型保全の具体的場面においては、森林の自然に自然保護的・趣味的な観点から関心を持つ都市住民と、歴史的にその地域の森林に関わり続けてきた地域住民との意識のありかたの違いが顕在化してきているように思います。これはお互いの対話と想像力で乗り越えることができる種類のものではなく、シンポジウム等も頻繁に行われるようになっていますが、継続的な対話的な関わりが必要です。

第二の分裂は、情報や技術を巡る分裂です。管理手法の選択を巡っても、かつての新炭林施業に規範をもとめる「低林管理」、落葉樹林の林内空間の快適性とそれによる利用可能性に着目した「高林管理」などが話題になっていますが、それらを複数の選択肢のなかから主体的に選択するための、情報や技術が市民側にまだもたらされていないように思います。農村共同体への郷愁を活動の軸とするグループは自然と前者を選択するでしょうし、市民のレクリエーションにとっての空間を指向するグループはまっすぐ後者を選択するでしょう。

情報がないため、こういった樹林の将来像さえ意識せぬまま、肉体労働的な参加が先行することもあるかもしれません。関わりについての多様な技術は多様な環境の発現につながることであり、悪いことではないと思いますが、市民が主体的に技術を選択していくために、十分な情報と議論の場が整備されるべきだと思います。

第三の分裂は、一見共有されている「里山」イメージのなかに隠れている、ある種のイデオロギー的な要素をめぐるものです。しばしば「里の風景は日本人の心の原風景だ」とか、「日本人の遺伝子のなかにそういう感覚は刷り込まれているのだ」とかといった言葉を聞きます。里山とのつきあいに代表されるような、かつての農村における生産・生活システムの全体性に対する憧憬や郷愁が、こうした里山保全活動の動機のある部分を占めているのです。私自身は親の代から町の生まれ町の育ちで、そうしたルーラルな空間というのは正直言って疎遠でした。しかし、その懐かしさみたいなものは確かにわかります。けれども、日本人誰もがそうした郷愁を持ちうるのでしょうか、あるいは持たなくてはならないのでしょうか。

常緑広葉樹林域に二次林として存在する落葉広葉樹林としての里山の風景、これがメディア上では最もポピュラーな里山のイメージだと思われそうですが、エリア的には特殊なものです。南九州や伊豆、南房総といった暖地や、もともとブナ林が成立するようなところでは、こうした里山は原風景を形作りようがないものです。

また、今日本にいる人すべてがその出自を農村に持っているわけではありません。漁撈に携わる人々、山で猟をしている人々、諸国を遊行する人々、もともと外国に出自を持っている人々...それぞれ関係しあいながらも、いろいろな形のいろいろな「日本人」がいたはずなのです。里山をダイレクトに「日本人性」と結びつける感性は、日本文化を稲作農耕だけから語ろうとするような恣意的な歴史観・文化観と共通する危うさを持っているような気がしてなりません。安直なふるさとノスタルジーは、これから日本の環境保全に関わっ

ていくであろう多様な主体を分断してしまう危険をはらんでいると思います。

それでもなお、「里山」がひとびとの心を惹きつけて止まないのはなぜなのでしょう？月並みな考えかもしれませんが、みんな、共生感覚を欲しがっているからなのではないでしょうか。単に種多様性の問題ではなく、時に不可視のものが潜んでいるかもしれないような、そんな空間を、平板な世界に暮らす現代人（特に都市「市民」）が必要としているからだと思うのです。民俗誌を読むときにも感じる、なにが懐かしい未開の感覚が、「里山」のどこかにまだあるような気がするのです。里山の環境に市民が期待している「多様性」とは、生態学的・客観科学的次元にとどまらない、ある種文化的な、精神の生態学とでも呼ぶべき次元にあるものなのかもしれません。「となりのトトロ」が多くのひとの心に訴えたのは、そういうところをうまく描き出していたからなのでしょう。こうした想像力が、もしかしたら各主体をつなぎ止めていくキーになるのかもしれませんが。

これからの里山はその地域内部だけのものではなく、もちろんその地域に根ざしつつも、幅広い人々が出会って行く場になっていくはずで、里山の自然のあり方は、人間的な価値が同時に自然としての内実を持ちうるということを我々に教えるものです。何よりも前に、人間同士がきちんと共生できる作法を身につけること、それがこうしたセクターを超え地域を超えていくような活動の基礎をなすものであるはずで

す。さまざまな分裂を超えて、いろいろな人が出会い、そこを共有する「公共的」な場が求められているのです。市民的な背景を持つ専門的な助言機関としての森林再生支援センターに期待されているのは、まさにそうした役割なのだと思います。

深町・佐久間（「里山研究の系譜 - 人と自然の接点を扱う計画論を模索する中で - 」，ランドスケープ研究 VOL61, No.4, p276-280）

竹林の生態と栽培技術

まえがき

竹林とは緑深く、清々しい環境というイメージと里山や造林地の環境を壊すという相反するイメージがあり、筆者

竹文化振興協会 渡邊 政俊

はこの嬉しい評価と腹立だしい悪評とのギャップに悩まされるこの頃である。しかし最近、その悪評に高い関心を寄

せる一般市民がみられるに至り、ようやくその悪評を払拭するチャンス到来と大いなる期待をしているところである。本稿では、こうした観点から竹林の生態的特徴と竹林栽培管理上重要なポイントを指摘し、その悪評払拭に少しでも寄与できれば幸いと思い本稿を綴ることにしたものである。

竹林の生産力

竹林の現存量¹⁾は、表1のように、モウソウチク林では竹稈量で37~88 ton/ha、またマダケ林では17~61 ton/haで、これは一般の森林における樹幹量に比べてかなり少ない。しかし、葉量は森林タイプの落葉広葉樹林から常緑広葉樹林²⁾に相当するほど多いのである。これは、竹林における葉の光合成はこれらの樹林と変わらないことを示すも

ので、これが竹林の力強い生産力となって現れているのである。

植物群落の生態系で同化生産物のうち植物体として固定される量を純生産量という。そこで、竹林の純生産量¹⁾をみると、表2のように、モウソウチク林で約15 ton/ha.yr.、マダケ林で20 ton/ha.yr. 以上にも達している。これらの例は特に生産力の大きいケースを示したものであるが、これをスギ林²⁾に当てはめてみると、林齢25年以上の造林地に相当するのである。このように、竹林は極めて大きい生産力を有する植物群落といえる。

竹林の生態的特徴

1)放任モウソウチク林

林野庁の統計によると、モウソウチク林の栽培面積は約2.7万ha(平成11年)となっている。しかし、現実に人手が入っている面積は恐らくその数分の1で、そのほとんどが無惨な放任状態にあり、これが世間を騒がせる原因になっているのである。

モウソウチク林にはタケノコ栽培林と竹材生産林の二つのタイプがあり、両者の栽培管理法はまったく異なる。元来、両タイプの竹林が長年放置されると、その林相は似たような状況に移行する。表3は京都近郊で調べた放任9林分の立竹状況³⁾を示したものである。すなわち、放任竹林には多数の枯竹が存在(時には2割以上)する一方、かなりの数の新竹も発生して竹林が存続し、そのような状態で生態的に安定した林相を維持することを示している。

竹林	竹稈	枝	葉	地上部計	資料
モウソウチク	40.6 ~ 87.6	7.3 ~ 12.5	3.1 ~ 5.5	51.0 ~ 105.6	鈴木(1976)
	36.5 ~ 63.5	8.2 ~ 11.0	3.5 ~ 4.8	48.2 ~ 79.3	Kao & Wang (1986)
マダケ	12.6 ~ 23.2	3.5 ~ 7.1	3.3 ~ 6.9	19.4 ~ 37.2	渡辺(1978)
	25.5 ~ 52.1	4.4 ~ 8.7	1.9 ~ 3.9	31.8 ~ 64.7	Watanabe (1983)
	17.3 ~ 61.2	3.8 ~ 13.7	1.4 ~ 6.0	21.1 ~ 80.9	渡辺・上田(1976)

表2 竹林の純生産量 (ton/ha.yr.)

竹林	竹稈	枝	葉	鞘	計	資料
モウソウチク	8.3	1.5	4.2	1.6	15.6	鈴木(1976)
	10.8	2.1	2.2	0.5	15.6	Kao & Wang (1986)
マダケ	14.3	2.3	3.9	1.2	21.7	Watanabe (1983)
	14.8	1.7	5.8	2.4	24.6	Isagi et al. (1993)

表3 放任されたモウソウチク林の立竹状況 (京都市近郊、1985)

竹林	本数/ha				胸高直径 (cm)			竹林の状態
	新竹	2年生以上	枯れ竹	計	新竹	2年生以上	枯れ竹	
A	963	5,082	1,840	7,885	14.0	13.4	10.8	放任タケノコ栽培林
B	902	5,112	1,353	7,367	11.5	11.5	9.0	"
C	1,076	4,412	1,076	6,564	13.3	13.2	10.7	放任竹材生産林
D	557	6,054	1,035	7,646	13.9	12.7	11.7	"
E	364	5,387	873	6,624	11.9	12.4	10.8	放任タケノコ栽培林
F	1,313	7,223	2,298	10,834	8.3	8.3	7.0	"
G	484	8,133	774	9,391	12.4	12.9	11.2	"
H	784	4,019	1,372	6,175	10.6	9.7	9.0	"
I	719	4,462	1,079	6,260	13.5	12.7	10.6	"

2)放任マダケ林

統計上では全国に約2.2万ha(平成11年)のマダケ栽培林がみられる。そのうち、どの程度の竹林が放任されているのか定かでないが、マダケ竹材の高い利用率から推して、放任竹林はモウソウチク林よりかなり少ないのではないかと思われる。

ここで、放任マダケ林の9林分についてその立竹状況^{4,5)}を示すと、表4となる。この表には枯竹の本数は示されていないが、新竹の本数は全立竹の15%程度を占めていることから、前述の放任モウソウチク林と似たような関係が想定できる。特に、放任マダケ林のE、F林分はha当たり4~5万本という高密度(5本/m²)であり、さらに多数の枯竹が残立しているのであるから、実際には林内を歩行することも容易でないほどの高密度である。

3)原生竹林の生態

自然状態の竹林は原生竹林といわれ、竹そのものの生態的特徴を知る重要な資料を与えてくれる。その一例として、京都で長年放任され、原生林化した竹林の動態を調査研究された上田・沼田⁶⁾の研究がある。その研究から、新竹の発生本数と枯竹の発生本数との関係を見ると、表5のようである。すなわち、7年間の平均では、毎年14.4本/100m²の新竹が発生し、毎年16.9本/m²の枯竹が発生していて、枯竹/新竹の発生割合は117%を示している。このことから、原生竹林では鬱蒼として竹以外の種が優占できない状態が保たれ、その結果新竹と枯竹の発生割合がほぼ一定になることから、これを「ほぼ極相とみてよい状態」と述べている。つまり、竹林が長年放置されると一定の立竹密度が保持され、いわば「極相」に近い状態に達するのであり、実

際の栽培ではこのことを基本に方策を検討することが重要なポイントになるのである。

もう一つ重要な点は竹林の分散構造である。分散構造とは、竹林における立竹のバラツキ方で、生態学では分布様式ともいう。ここで、先に紹介した原生竹林の分散構造を示すと、図1のようである。図中、白丸は生立竹、黒丸は

枯竹であり、これを統計学的に分析すると、この竹林の場合、分散構造は「小さいかたまりのあるランダム分布」となる。

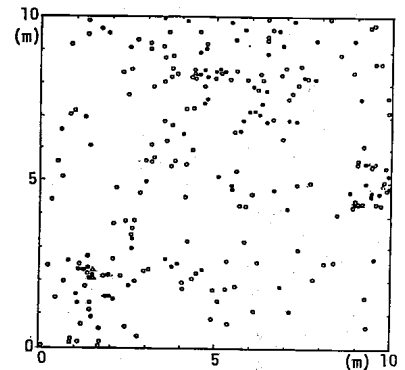


図1 放任されたマダケ林の立竹の分布図

つまり、立竹はランダムに分布し、所々に小さいかたまりのある分布様式なのである。これがモウソウチク林やマダケ林の基本的な分散構造であり、実際の栽培管理、特に伐竹収穫に際しこのことを考慮しながら択伐する必要性が示唆されているのである。

表4 放任マダケ林の立竹状況 (京都近郊、1990, 1995)

調査地	本数 / ha			胸高直径 (cm)			林相
	新竹	2年生以上	計	新竹	2年生以上	平均	
A	2,031	6,484	8,515	4.9	5.6	5.7	比較的太い竹が密生
B	1,250	6,875	8,125	5.1	5.4	5.6	"
C	2,344	15,625	17,969	4.2	3	3.4	比較的細い竹が密生
D	1,719	17,656	19,375	4.6	3.4	3.5	"
E	3,780	47,880	51,660	3.5	3.2	3.2	小径竹が密生状態
F	4,375	36,875	41,250	2.1	3.2	3.0	"

表5 原生竹林の新竹発生本数と枯死本数との関係 (京都、1961)

調査期間	新竹発生	枯死発生	枯死 / 新竹	林相
	本数 / 100_	本数 / 100_	(%)	
'53年3月~'55年4月	30	49	163.3	急斜地ながら安定
'55年4月~'56年10月	32	43	134.4	
'56年10月~'58年10月	14	19	135.7	
'58年10月~'60年10月	39	24	61.5	
1年当たりの平均	14.4	16.9	117.4	

栽培管理のポイント

1)整理伐

実際に栽培管理されている竹林では整理伐⁵⁾と呼ばれる施業は存在しない。しかし、前述のように、長年放置された竹林では枯竹や老齡竹、不良竹などが乱立していて、容易に林内に入ることも、作業することも出来ない状況にある。このような竹林では第一に実施しなければならない施業が整理伐である。この整理伐は、まさに竹林を整理するための作業であって、その内容はおよそ次のようである。

- 枯竹の除去 = すべての枯竹の伐採・除去
- 倒伏竹の除去 = 倒伏している竹を処理・除去
- 老齡竹の除去 = 竹稈表面の色が褐色で、葉量が明らかに少なく感じる竹を伐竹・除去

不良竹の除去 = 竹齡に関係なく、極端に小径な竹を伐竹・除去

放任竹林でこの整理伐を実施すると林況は一変する。筆者は、これまで入林も困難だった竹林を整理伐によって見事に美林に変身させた経験⁵⁾があることから、その重要性を強調しておきたい。

2) 竹の生理的働きと竹林の施業との関係

竹林の栽培管理を考える上において、まず竹の生理的働きと竹林施業との関係を知る必要がある。図2は、一例としてモウソウチク林を想定した場合の月別の年間関係図を示したものである。まず、1月～3月は発筍前の期間で、生理的にはいわば発筍準備期に当たり、地下茎の芽が盛んに成長している時期である。4月～6月は発筍、伸長期であり、タケノコの収穫期でもある。この時期には竹が葉替わりし、紅葉することから「竹の秋」と呼ばれている。また、この時期、タケノコの発生・伸長のために地下茎中の貯蔵養分がほとんど使い果たされている⁷⁾ため施肥されること

月	生理的働き	竹林の施業
1	発筍準備期	①伐竹後の蓄積量(伐り残し量)
2		発筍前の施肥
3		
4	発筍生長期	筍の収穫
5		②新竹発生量(広義の生産量)
6		発筍・新竹成長後の施肥(お礼ごえ)
7	「竹の秋」期	
8		③成長期の成立竹量
9		
10	地下茎伸長期	新竹に発生年号を記入
11		伐竹収穫期(整理伐を含む)
12		④伐竹量(収穫量)

図2 竹類の生理的働きと竹林施業との関係図(モウソウチク林の場合)

表6 竹材生産を目的とする竹林の立竹密度管理

	(本/10a)			
	*マダケ林		**モウソウチク林	
	A竹林	B竹林	A竹林	B竹林
伐竹後の蓄積量(伐り残し量)	668	755	558	368
新竹発生量(広義の生産量)	348	158	70	56
成長期の成立竹量	1,016	913	628	424
伐竹量(収穫量)	470	205	88	68

A竹林 = 比較的小径竹林、B竹林 = 大径竹林

* 渡辺政俊他(1995) ** 上田弘一郎(1963)

から、収穫に対する「お礼ごえ」と言われている。

7月～10月の期間は竹類がもっとも活発に光合成する時期であり、同時に地下茎を伸ばす時期でもある。したがって、この時期の成立竹量は竹林の生理的盛衰に大きな影響を及ぼす。10月～12月は伐竹収穫時期である。収穫した竹材を活用しようとするなら、虫害発生の危険性の低いこの時期に伐竹すべきである。

3) 竹林管理における立竹密度の移り変わり

竹林栽培の最重要課題は立竹の密度管理である。すなわち、理想的な密度管理とは「高い生産性 = 新竹発生量(利回り)」と「現存量 = 成長期の成立竹量(預金)の調整」との関係で成立させることである。言い換えると、高い利息(収穫)が得られるような預金額(成長期の成立竹量)を考えることである。そのためには、竹林には常に若くて元気な竹(一般には5年生以下)を立てるよう導く必要がある。つまり、伐竹収穫ではその竹林のなかの高齢の竹が選ばれ、それを択伐するのが基本である。

この基本を踏まえ、立竹密度の時期的な移り変わりを示すと;

伐竹後の蓄積量 = 前年秋に収穫された後に竹林に残された量で、切り残し量。

新竹発生量 = その年に発生した新竹の量で、生産量 = 利息に相当。

成長期の成立竹量 = 「伐竹後の蓄積量」に「新竹発生量」を加えた量で、竹類がもっとも活発に光合成を行う時期の立竹量、すなわち預金額に相当。

伐竹量 = 収穫量で、利息の受取分に相当。

これを一年のサイクルでみると、「伐竹後の蓄積量」+「新竹発生量」=「成長期の成立竹量」-「伐竹量」が毎年繰り返されることになり、理想的な密度管理は「新竹発生量」=「伐竹量」の関係を成立させることである。

4) 密度管理の実例

表6は、マダケ林⁵⁾とモウソウチク林⁸⁾の立竹密度管理の実例を示したものである。表より、竹林を構成する立竹の直径によって密度にかなりの違いがあるが、基本的には小径竹林の密度は大径竹林の密度より高く、また前者は新竹発生量や伐

竹量も本数的に多くなる。この例では、新竹発生量と伐竹量とは完全に一致していないが、ほぼ同数に近い傾向で管理されており、かなり理想的な密度管理が行われた例といえる。ただし、密度の決定はその林分の生育条件によって決まるものであるから、表6はあくまでも実例として参考にすべきであることを記しておく。

おわりに

筆者は、常々「竹林」と「竹やぶ」を区別している。すなわち、「竹林」とは、例えば嵯峨野あたりに見られるよく管理され、清々しい雰囲気をかもしている竹の群落であり、「竹やぶ」とは見るも無惨に放置されている自然状態の竹の群落と定義してきた。したがって、今やあまりに「竹やぶ」が多いといえる。筆者は、「竹やぶ」にせめて整理伐だけでも実施されたなら、かなりの「竹やぶ」が「竹林」化するであろうと信じている。竹林は緑環境を創造し、人々の暮らしに竹文化を育み、そして持続的な植物有効活用資

源として注目されることを期待して止まないのである。

引用文献

- 1) 渡辺政俊：沼田眞編、現代生態学とその周辺. 150-155 竹林施業とその生態. 東海大学出版会. 1995
- 2) 只木良也・蜂屋欣二：森林生態系とその物質生産. 森林科学技術振興所. 1968
- 3) 渡辺政俊：竹林の生態的特徴に関する研究() 放任モウソウチク林の林分構造. Bamboo Journal No.3:7-17, 1985
- 4) 渡辺政俊・井上雅晴：放任マダケ細竹林の構造. 富士竹類植物園報告 34:11-19, 1990
- 5) 渡辺政俊・井上雅晴・高野忠男：京都嵯峨大覚寺境内におけるマダケ林の改善施業. Bamboo Journal 13:42-54, 1995
- 6) 上田弘一郎・沼田眞：原生竹林の更新とその生態学的研究. 京大演報 33:27-54, 1961
- 7) 内村悦三：「竹」への招待 - その不思議な生態 -. 研成社. 1994
- 8) 上田弘一郎：有用竹と筍 - 栽培の新技术 -. 博友社, 1963

*1. この文章は2001年5月19日に開催された、森林再生支援センター第2回年次総会にてご講演戴いた内容を元に寄稿していただきました。

特定非営利活動法人 森林再生支援センター

第二回年次総会議事録

日時： 2001年5月19日(土)13:30~16:30 場所： 京大会館大会議室 出席者： 39名(委任状21名分)

・昨年度の活動について

1. 平成12年度 事業報告

森林再生支援センターニュースNo.3に掲載されている事業報告を元に、平成12年度に行われた事業について報告されました。

第1回年次総会の開催

長野県王滝村堆砂渾土木法面緑化計画委託業務

モミ林見学

徳島県南部運動公園林分改善実施計画策定委託業務
(建設コンサルタントを経由した受託)

ニュースレター発行

新聞社の取材

NPO活動の紹介記事として。

一般からの問い合わせ

メーリングリスト(ML)活用

ホームページも現在工事中。

京都府二ホンジカ特定鳥獣保護管理計画検討会への参加

森林再生支援センター専門委員個人への依頼

本センターの専門委員としての依頼に基づいた相談

2. 平成12年度 会計報告

(平成12年度会計収支報告書 参照)

受託費 長野県王滝村・徳島県林分改善事業受託費
 管理費 雑費 事務用品・申請諸経費
 事業費 視察・交通費 徳島県林分改善調査他
 委託費 高田森林緑地研究所・上田植物調査所ほか

【監査報告】 下村監事・野間監事より、上記会計報告に不正がなかったことを承認いただきました。

本年度の活動について

1. 平成13年度事業計画

以下の12事業について説明がなされました。

緑化施工地の中長期評価のためのデータベース作成事業
 緑地が地域の自然環境資源作りに貢献してきたか否かをデータ化していく作業。今年度は、調査計画を検討し、調査を開始する。

京都の自然風景の変換と将来のあり方を考える事業

京都北ロータリークラブとの共同企画。

徳島県南部運動公園のモウソウチク林改善・保全計画と一部

実施にともなうモニタリング調査

長野県王滝村の牧尾ダム渫土法面の緑化計画支援

前年度の緑化計画に基づき、村側のアドバイザーとして監督する。

岩手県北上市展勝地のあり方を考える支援事業

北上市のガイア展勝の会の活動支援として、自然環境保全、育成計画立案へのアドバイス、調査研究を行う

大峰プロジェクト

ニホンジカによる食害林分の回復調査を開始。

モミプロジェクト

モミ林復元のためのモミ苗木育成と植栽を進めるプロジェクト。本年度も見学会を実施、実生の採取を行う。

地域性苗木の育成支援

地域性苗木の種子採取、育成方法など技術的支援を行う。

市民と里山のカップリングに対する研究

各地で進められている里山整備事業の社会的な条件整理、問題点の抽出を行い、市民と自然の関わりのあるあり方、進むべき方向を考える。

シンポジウムの開催

東京にて、市民・行政・専門家が集まり、自然保護と自然回復緑化を考えるシンポジウムを開催する

平成12年度 会計収支報告書

自平成12年5月9日 至平成13年3月31日

特定非営利活動法人 森林再生支援センター

科目	金額
.収入の部	
1.会費収入	
入会金(66名分)	¥198,000
年会費(66名分)	¥198,000
賛助会費(11社分)	¥140,000
2.総会収入	
第一回年次総会	¥111,000
懇親会	¥240,000
3.受託費	¥2,109,370
4.借入金	¥255,000
5.その他収入	¥48
当期収入合計	¥3,251,418
前期繰越収支差額	¥0
収入合計	¥3,251,418
.支出の部	
1.管理費	
人件費	¥552,000
通信費	¥210,560
印刷費	¥46,210
会議費	¥61,429
雑費	¥166,131
2.事業費	
視察・交通費	¥527,511
3.委託費	¥620,000
4.総会費用	
第一回年次総会	¥84,674
懇親会	¥253,669
5.会費返金	¥6,000
6.返済金	¥255,000
当期支出合計	¥2,783,184
当期収支差額	¥468,234
(当期収入合計-当期支出合計)	
次期繰越収支差額	¥468,234
(収入合計-当期支出合計)	

*資金の範囲には現金預金・未払い金を含めています。

ホームページの作成

現在工事中のホームページを完成させる。

ニュースレターの発行

その他

会員・専門委員の創意発案、会員・専門委員への各種依頼の内、センターの趣旨に合致する事業について、理事会で承認の上、センターの事業として進める。

2. 平成13年度 会計収支予算

(平成13年度会計収支予算書 参照)

平成13年度 会計収支予算書

自平成13年5月9日 至平成14年3月31日

特定非営利活動法人 森林再生支援センター

科目	金額
収入の部	
1. 会費収入	
入会金 (14名分)	¥42,000
年会費 (80名分)	¥240,000
賛助会費 (15社分)	¥150,000
2. 受託費	¥4,000,000
当期収入合計	¥4,432,000
前期繰越収支差額	¥468,234
収入合計	¥4,900,234
支出の部	
1. 管理費	
人件費	¥600,000
通信費	¥270,000
印刷費	¥70,000
調査等交通費	¥250,000
講演会・会議費	¥100,000
モニタリング調査費	¥250,234
雑費	¥360,000
2. 委託費	¥3,000,000
当期支出合計	¥4,900,234
次期繰越収支差額	¥0
(収入合計-当期支出合計)	

【理事会役員の再任について】

付則により、平成13年度も前年度と同じく、役員の再任が承認されました。

任期は15年3月末までとなります。

《センター事業への質問・意見》

Q. 一般からの問い合わせにはどのような回答をしているのか。

A. 京都には“淡海森林クラブ“みどりの会桃山”、そして、本センター専門委員の松本茂氏が主催されている“森林体験セミナー”など、一般の方々が参加して森の作業を体験できるグループを紹介しています。

Q. 調査の為の予算をきっちりと出すべきではないのか。

A. 研究助成金などに応募するなど考慮中。

シリーズイベント 「京都の自然風景を考える」 ご案内

この度、京都北ロータリークラブと森林再生支援センターの共催で、シリーズイベント「京都の自然風景を考える」の開催が決定されました。

国内外から多数の旅行者を引き寄せる、魅力あふれる町京都。その自然風景の移り変わりを広く一般の方々にも認知していただき、どのような姿勢で自然と関わりを持つべきかを考えていく手がかりにしていきたいと思っております。

このイベントに関しまして、農林水産省林野庁、京都府、京都市、京都新聞社からもご後援を戴けることとなりました。センター会員のみなさまも、ぜひ積極的に参加下さいますようお願い致します。

《自然ふれあい教室》

放置竹林または侵入竹林の除間伐

日時：2001年10月14日(日)

場所：西芳寺近くの松尾国有林内

竹炭を焼く

日時：2001年11月25日(日)

内容：自分たちで除間伐した竹を炭にする。

クリスマスリース作り

日時：2001年12月10日(日)

内容：放置林より採取したツルを用いて

クリスマスリースを作る。

《シンポジウム》

日時2002年2月17日(日)13:00~

場所：京都市北文化会館

内容：「京都の自然風景を考える」

講演及びパネルディスカッション

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案は下記まで

特定非営利活動法人森林再生支援センター 事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町28-5

TEL/FAX : 075-211-4145 E-mail : Info@crnm.net